（別紙２）

論文審査の結果の要旨

氏名　塩村（しおむら）　耕（こう）

本論文は、井原西鶴を中心とする近世前期文学を、伝記的研究、書誌学的研究、出版史研究の３つの視座から詳細に検討し、その特質を総合的に解明したものである。構成は、序章として「裁断橋銘文の一字の読み」等２編の論考を置き、以下、第１章「近世前期文人伝」に「二人の艶隠者伝」等４編、第２章「西鶴の諸相」に「西鶴伝の一、二の問題」等 11 編、第３章「書誌と出版」に「さいとり考」等３編の論考を配し、同章末には付録「近世前期江戸の出版界について―付、元禄末年以前の江戸版元と出版物一覧」を収める。

序章では、熱田の「裁断橋銘文」や岩瀬文庫の悉皆調査に基づく新出資料を具体的に引きながら、生の有限性を乗り越えうる文献資料の意義について論じる。

第１章では、文学史的には重要な存在でありながら従来その伝記が未詳であった、俳人の津田休甫や啓蒙的著述家の山雲子こと坂内直頼等々を取り上げ、新発見の資料により詳細な事績を明らかにするとともに、「艶隠者」や「俗学者」という新たな概念を導入して、その文業の意義を同時代文壇中に的確に位置づける。

第２章では、近世前期文学中の最大の存在である西鶴を様々な方向から解明する。本論文の立てた３つの視座からの分析が最も有効であるのが西鶴であり、その結果、本章ではとりわけ大きな成果を挙げている。例えば、西鶴の居住地を同時代の大坂案内記類と照合し、西鶴が富裕な町人だったとする通説に疑問を呈するとともに、町屋と武家地の境界に一貫して住んだことが、町人作家でありながら、武士の生態への興味をも持った、複雑で特異な西鶴文学の性格を形成したとする。また、西鶴最晩年の作とされてきた『浮世栄花一代男』の改題本を含めた全ての現存本の書誌を詳細に検討し、この作品が実は西鶴作を装い、西鶴没後に刊行されたものであることを鮮やかに立証する。さらに、西鶴作品には、周知の典拠にことさらな改変を加え、作中に暗示的に提示することで、重層的な読みを読者にもたらす「暗示的手法」が使われていることを指摘して、『好色五人女』のお七には小町の面影が重ねられていることを明らかにし、従来の作品論を格段に深めている。

第３章では、書誌学的・出版史的な観点から、特に注目すべき書物を取り上げ、文学や芸能にかかわる新たな知見を提示する。新出の近世初期の絵入り歌謡版本『さいとり』を手がかりに、関連資料を博捜し、未詳の古芸能である「さいとり舞」（鳥刺し舞）を明らかにし、また浮世草子の挿絵の絵組みを指示した文書を発見し、浮世草子の制作の一端を明らかにする。末尾の江戸版元とその出版物の一覧は、文字通りの労作で、元禄末までの江戸の書肆が網羅されており、今後、近世前期の出版研究はもとより、文化研究全般の基礎資料となるべきものである。

従来の近世前期文学の研究は、限られた数の作品に関する、主として版本の諸版の整理に限られていたが、本論文は数々の新資料と博捜を重ねた厖大な関連資料を駆使して、伝記や作品成立にかかわる事実の解明を大幅に進捗させ、また伝記・書誌・出版という多様な視座を導入することによって、平板な作家論・作品論から抜け出し、近世前期の文化状況・文壇状況と切り結んだ作家論・作品論に高めているところに画期的な意味がある。「暗示的手法」の分析結果は、それがまさに「暗示的」であるがゆえに若干の異論があり得るかもしれないが、西鶴の深層の方法にまで踏み込んだ意義は、極めて高く評価できる。よって、本審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位に相当するものと判断する。